

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	池邊 智基
論文題目	セネガルにおけるバイファルの宗教実践と言説空間 ー托鉢、祝祭、説教に着目してー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、西アフリカ・セネガル共和国に成立したイスラーム神秘主義教団ムリッドの内部集団バイファルを対象とした研究である。バイファルは、ムリッド教団内部でさまざまな宗教活動を担っているが、礼拝や断食をせず導師のためにひたすら働くことやその特徴的身なりから、異端視されることも多い。本研究は、長期間のフィールドワークに基づいて、(1)ムリッド教団とバイファルとは、それぞれいかなる組織であるのか、(2)現代においていかにバイファルの宗教実践が行われているのか、そして、(3)宗教実践に関連するものとして、どのような宗教的言説があり、バイファルはそれをどのように解釈しているのか、という三つの問いに答えようとするものである。まず第1章で、西アフリカ・イスラーム研究の概説を行った上で、本論では、上記の三つの問いに対応した、以下のような三部構成をとってこれらを論じている。</p> <p>第一部では、ムリッド教団とバイファルという組織がいかに構成されているかを論じている。第2章では、ムリッド教団の開祖バンバの経歴、共同体の設立と教育思想などについてまとめる。ここでは、国家とムリッド教団の関係という政治経済的文脈からの従来の議論を整理するとともに、「教団」という枠組みでムリッド教団をとらえることについての陥穽を指摘する。こうした議論は、ムリッド教団内部の個別の組織の活動について論じる必要性を示すものである。そこで第3章では、バンバの弟子でバイファルを形成したイブラ・ファルの経歴や彼の思想などを紹介し、バイファルの共同体の歴史を概観する。そして、現代のバイファルにも共有されている概念や宗教実践など、彼らの宗教生活についてまとめる。その上で、彼らの宗教的な「逸脱」性は、いくつもの社会的スティグマによって形成されていることに起因することを示す。</p> <p>第二部では、バイファルが組織を構成する上での、経済的な「労働」実践について明らかにしていく。まず、第4章ではバイファルの主要な「労働」実践である托鉢の方法や組織についてまとめる。この「労働」実践においては、導師に対して贈られる贈り物「アディヤ」が重要な鍵概念となる。そこで、組織単位で集められたアディヤが分配されていく場についても明らかにしていく。第5章では、托鉢の組織のとりまとめを担うジャウリンについて論じる。そして、ジャウリンが導師からの「命令」を伝達するという役割を持っている点に注目し、それがバイファルの組織化とアディヤの再分配を可能にしていることを明らかにしている。</p> <p>第三部では、祝祭における説教ワフターンを対象に議論を進めている。第6章では、</p>			

口承による教義や宗教的言説について論じるための理論的視座を提示する。まずリテラシーとオラリティの二項対立を問題視することを通じて、儀礼と言語をめぐる論点を整理する。さらに、ウォロフ語のコミュニケーションの特徴について説明する。第7章では、ワフターンの内容と形式を分析し、語彙や引用の作法、語り手の間の階層的關係、語りの時間軸に注目することで、その言説的伝統の生成と再生産について論じる。第8章は、ワフターンにおいて特徴的な、権威の声を伝える伝達役という役割について論じるものである。伝達役による報告・引用発話の形式性について分析することで、彼らが声を権威化するという技法を明らかにする。第9章では、ワフターンにおける過去のことばの引用について、指標性、テキスト化といった観点から論じる。結論部となる第10章では、本論を通じて明らかにしたバイファルの組織、「労働」実践、コミュニケーション様式がムリッド教団の特徴をボトムアップに形作っていると論じた。

(論文審査の結果の要旨)

ムリッド教団の内部集団であるバイファルは、その特徴的な風貌やライフスタイルから、セネガルを訪れる多くの人々の注目を集める存在である。しかしながら、アフリカ地域研究の文脈ではムリッド教団やバイファルについてのミクロな実証的研究はまだほとんど行われておらず、基礎的なデータの蓄積とその理解についての理論的枠組みの構築が求められている。こうした状況で本論文は、ムリッド教団の組織構造（第一部）、托鉢という「労働」実践（第二部）、祝祭での説教ワフターンにおけるコミュニケーション（第三部）に着目し、(1)ムリッド教団とバイファルとは、それぞれいかなる組織であるのか、(2)現代においていかにバイファルの宗教実践が行われているのか、そして、(3)宗教実践に関連するものとしてどのような宗教的言説があり、バイファルはそれをどのように解釈しているのか、という三つの問いに答えることを通じて、ムリッド教団とバイファルについての包括的な理解を提示しようとするものである。

本論文は、以下の3点においてアフリカ地域研究に重要な貢献を行っている。

第1の貢献は、詳細な民族誌的記述を通じて、ムリッド教団やバイファルの組織形態と活動実態を明らかにしたことである。バイファルについての先行研究が進んでいなかった大きな理由の一つは、これらが教典によらない宗教実践によって担われてきたために、文献資料を重視するイスラーム研究史において周縁化されてきたことにある。これに対して本論文は、セネガルにおける長期のフィールドワークを敢行し、対象集団の人々と寝食を共にすることによって、その日常生活を詳細に記述し、ムリッド教団やバイファルのイメージを刷新することに成功している。

第2に本論文は、対象集団による労働実践の分析とコミュニケーションの分析を結びつける地域研究のモデルケースとして位置づけられる。とりわけ、著者が対象集団に深く関わることで、通常はアクセスすることさえ難しい托鉢をめぐる金品の流れについての正確なデータを収集するとともに、ワフターンにおける監督役ジャウリンなどの語りについての詳細な文字起こしを作成して信者たちとのやりとりの機微を分析の遡上にあげることによって、ムリッド教団やバイファルに関わるさまざまなアクターがその生活世界を構築、再生産するプロセスについて優れた考察を行っている。

第3の貢献は、近年の歴史研究、思想研究、人類学などで盛んに論じられてきたリテラシーとオラリティに関する議論に新たな理論的視座を導入している点である。著者はコミュニケーション研究に関する最新の知見を取り入れつつ、ワフターンの内容と形式の詳細な分析を行うことを通じて、リテラシーとオラリティを二項対立的にとらえることを回避し、そこでの語りにおいて権威の音がテキスト化、コンテクスト化されるプロセスを明らかにすることを試みている。今後さらなる関連データの収集と分析を積み重ね、この議論を検証・精緻化していくことにより、リテラシーとオラリティと関連した

権力作用とその正当化についての理解を改訂することが可能になるであろう。

このように本論文は、ムリッド教団のバイファルについての新しく、かつ重要な事例研究を行うことを通じて、アフリカ地域研究に優れた学術的貢献を行った。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2021年2月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。